

The Analysis of Japanese National Identity

: with the cross-national comparison between Japan and the U.S.

米田 雅一

Alan S. Miller

本研究では、国際比較調査グループである ISSP(International Social Survey Programme) が 1995 年に 23 カ国で実施した「国への帰属意識に関する国際比較調査」の日本分とアメリカ分の調査結果を用いて日米のナショナルアイデンティティについて探索的な分析を行い、比較を試みたものである。

今回の分析では ISSP の定めた質問紙項目を内容によって分類した。分類された項目は以下の 10 項目である。「1. 居住地域への愛着」「2. 居住地域への定着志向」「3. 国の一体化志向」「4. 国民の条件」「5. 国への誇り意識」「6. 国意識 (自国中心意識)」「7. 国際意識」「8. エスニシティ志向」「9. 外国人寛容度」「10. 民族への愛着」。以上の項目について、それぞれ 2(country)×2(sex)ANOVA を行い、また各項目と年齢との相関分析を行った。

その結果、日本とアメリカで様々な興味深い差異が認められた。まず ANOVA の結果、居住地域への愛着・定着志向では日本人の方が高い値を示したが、国の一体志向では逆にアメリカの方が高い値を示した。国民の条件意識では条件の内容によって日米に差が認められた。国への誇り意識ではアメリカ人の方が高い値を示した。ここでは日本では女性の方が誇り意識が高く、アメリカでは男性の方が誇り意識が高いという交互作用が見られた。さらに、国意識・国際意識・エスニシティ志向・外国人寛容度についての分析では、アメリカ人の方が日本人より自国中心的傾向を示した。日本の分析結果では女性の方が男性より自国中心的であったが、アメリカでは性別による差はみられなかった。民族への愛着では日本人の方が高い値を示した。

次に年齢と各項目の相関分析の結果、日本では国際意識とエスニシティ志向の一部を除くすべての項目で強い正の相関が見られた。アメリカでは国の一体志向・国民の条件の一部・国際意識・民族への愛着においては相関がみられなかったもののその他の項目では強い正の相関が見られた。

以上のように、本研究では分析結果の記述をするのみにとどまっており、日米のナショナルアイデンティティの本質に言及することはできなかった。しかしながら、いくつかの項目で明確な国家間・性別による差、また年齢との相関を指摘できたことは今後のナショナルアイデンティティ研究にとって有意義であったと思われる。